

第9話「「聞いているよ！」を伝えよう」

課題	相手の話に関心がないと思われてしまった
ストラテジー	効果的にあいづちを打つ
効果	・関心を持って相手の話を聞いているということを伝えることができる ・相手に話を先に進めてほしいというサインを送ることができる

<課題>

効果的にあいづちを打つ



スアンは葵の恋の話を真剣に聞いていましたが、葵は「人の恋の話とかめんどくさいよね。ごめん。」と言って話をやめてしまいました。葵はスアンがだまっている様子を見て、自分の話に関心がないと思ったようです。一方、葵の話を真剣に聞いていたスアンは、葵が話をやめてしまった理由がわからなくて戸惑いました。

<ストラテジー使用場面>



スアン：先輩は何が好きなんです。

葵：そうだなあ。甘いものが好きなんだ。

スアン：へえ、そうなんですか。

葵：甘いものって言ってもさあ、

スアン：うん。

葵：ケーキとかじゃなくてさあ、

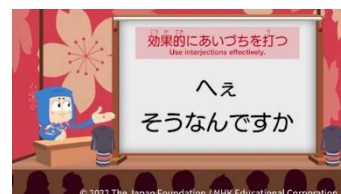
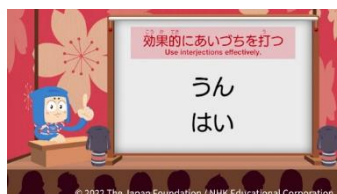
スアン：うん。

葵：おまんじゅうとかのあんこ系なんだよね。

スアン：へえ、おまんじゅうですか。

<スアンが使ったストラテジー>

効果的にあいづちを打つ



スアンは葵の話を聞きながら、「うん」「はい」「へえ、そうなんですか」などの短い反応をしまし

た。このような相手の話の間にはさむ短い反応を「あいづち」といいます。あいづちを効果的に使うと、関心を持って相手の話を聞いているということが伝わります。スアンがあいづちを打ったことで、葵はスアンが関心を持って自分の話を聞いていることがわかり、話が続けやすくなりました。

<どんなストラテジー？>

このストラテジーは、会話をうまく行うためのストラテジーの一つです。会話をするときに、関心を持って聞いている、ということを相手に伝えることは、会話を進めるためにとても大切です。どの言語にもありますが、話を聞くとときに使用する短い反応のことを日本語で「あいづち」といいます。あいづちを使うことで、相手の話に関心を持って聞いていることが伝えられますし、話を先に進めたいというサインにもなるので、効果的に使えば、会話がテンポよく進められます。

<どうやって使う？>

この話で取り上げているのは①相手の発話の短い切れ目の間にはさむ「うん」「はい」などのあいづちと、②相手の発話の終わりなどにはさむ「へえ、そうなんですか」などのあいづちです。

①相手の話の短い切れ目の間にはさむ「うん」「はい」などのあいづちは、打つタイミングが大切です。基本的には、話の区切れ目があいづちを打つのにいいタイミングです。スアンと葵の場合は、葵が「甘いものっていってもさあ」「ケーキとかじゃなくてさあ」と話の区切れ目ごとに「さあ」という表現(間投詞)を使用しており、あいづちを打つタイミングがわかりやすくなっています。

葵： 甘いものっていってもさあ、
スアン： うん。
葵： ケーキとかじゃなくてさあ、
スアン： うん。
葵： おまんじゅうとかのあんこ系なんだよね。

あいづちを打つタイミングを示す表現(間投詞)には、「さあ」以外に「ね」もよく使用されます。これらの間投助詞以外にも、「～て」「～けど」「～から」などの接続助詞で示される発話の区切れ目もこのタイプのあいづちを打つタイミングを示すサインの一つです。また、このタイプのあいづちはうなづきを伴うことも多いので、あいづちを打つタイミングがうまくつかめないときは、声を出さずにうなづくことから始めてみるといいでしょう。

一般的に、日本語による会話ではあいづちが多いと言われています。これは①のあいづちが多いからです。そのため、日本語での会話の場合、聞き手があいづちを打たないと、話し手から「(ちゃんと)聞いていない」とか、「私の話がわかっていない」「つまらないと思っている」などと受け取られてしまうこともあるでしょう。

②相手の発話の終わりなどにはさむ「へえ、そうなんですか」は、相手の発話に簡単なコメントを

伝えるあいづちです。スアンのように「甘いものが好きなんだ。」「おまんじゅうとかのあんこ系なんだよね。」など相手の話の文末、つまり、①よりもう少しまとまったところで使われ、その前の発話に対するコメントの形をとります。

スアン：先輩は何が好きなんですか。

葵：そうだなあ。甘いものが好きなんだ。

スアン：へえ、そうなんですか。

(中略)

葵：おまんじゅうとかのあんこ系なんだよね。

スアン：へえ、おまんじゅうですか。

「へえ、そうなんですか」以外にも、スアンのように「へえ、おまんじゅうですか」と相手の言ったことの一部を繰り返したり、「へえ、意外」「ふーん、知らなかった」のように感想を簡単に加えたりすることもあります。

＜もう一步＞ あいづちは多い方がいい？

あいづちを打つことが大切だと言っても、多ければ多いほどいいのかというと、そういうわけでもありません。確かに、相手の話への関心が強ければ強いほど、「うんうん」と続けてあいづちを打ったり、あいづちを打つ間が短く頻繁になったりしますが、あいづちを多く打ちすぎるのは、話している方にとって、ちょっとうるさいと覚えることもあるようです。

会話は一人で作り上げるものではありません。相手がゆったりと話せば、聞き手もゆったりとあいづちを打ったり、相手が興奮して話しているときは、聞き手も興奮してあいづちが頻繁になったりします。お互いのテンポをよく見て、気持ちの良い、効果的なあいづちが打てるようになるといいですね。

あいづちの打ち方は人によっても違いがあります。まわりの会話を観察して、ほかの人がどのようにあいづちを打っているのか見てみましょう。